



第七卷第三號

子供のいたづら

いたづらと一口に云ふと大層悪いことの様に見えるし、之を字に表はして悪戯と書くと尙更悪く見へるが決してそ一概にけなしたものではない。吾大に之を重視しなければならぬ。叔母さんから此の薄のろめと叱り飛ばされたワットが蒸氣機關の發明をするし、和蘭の一眼鏡師は小供いたづらに小言云ひながら望遠鏡を工夫したと云ふではないか。して見ると世界の大發明は小供のいたづらから出ると云ふとも豈誣ひざらんやだ。實際小供の遊び程研究的態度に出でゝるものは大人にはたんとないです、フレールベルが小供の遊戯の結果を三つに分類して一を營生式(外界の摸倣)と云つたのもつまり幼児遊戯の三動機を看破したので遊戯と研究的態度との密接なる關係を云ひ表はしたものであります。所で幼児をして遊戯の上に此研究的態度を取らせ様とするには彼等をして常に自由に快活に遊戯せしむることが必要條件で決して他より汗流刷耐などをしてはならないのであります。幼児遊戯の看護者は「眼はつけよ、手はつけるな」と云ふ諺を味はなければなりません。

(湘南)